

1978年夏期講習の御講話(17)

人が死ぬとき、捨てられるのは肉体である

愚かな人々は、常に周りのものごとに執着の念を抱いている
偏狭な心は、決して解脱や超然が何であることを理解できない

寛大な心を持つ人は、決して悪いことをしようとはしない
動物の心を持つ人は、常に悪い行為のことだけを考えてしまうだろう

清らかな真我の化身（パヴィットラアートマ・スワルーパ）である皆さん、
もし神性の側面を理解したり教えたりしたいのであれば、きれいな心を持って
いなければなりません。自分の心を清めていない人は誰であれ、神性の面を他人
に教えたり、理解したりすることはできないでしょう。皆さんは、説教している
すべての人が清らかな心を持っているのだろうかと思ねるかもしれません。人間
がこれほどの深みにまで墮落してしまった理由は、清らかな心を持っていない人
が他人に説教をしているからです。

暗く、汚い部屋には、サソリや蛇、その他の虫たちが入って来る可能性があります。
もし部屋が清潔で十分に明るいなら、そんな悪い虫たちが入って来る可能
性はありません。それと同じように、善良で清らかな心を持っている人には、色
欲やエゴ、嫉妬や怒りが入って来たり、まん延したりすることはありません。基
準を定めて自分自身を照合し、それを尺度として受け入れることができたとき、
あなたは自分がどれほど多くの悪い性質を持っているかに気付くことでしょう。
無知を取り除くにはアートマ〔真我〕の知識を手に入れなければなりません。

炭を洗うために牛乳と石鹼を使っても、炭は白くなりません。反対に、牛乳と
石鹼が黒くなってしまふかもしれません。皆さんは、炭が白く輝く可能性などあ
るのかと思ねるかもしれません。炭が明るく、白く変わる可能性はまったくない
わけではありません。炭は火と接触すると明るく光って見えるのです。ここで私
たちは、たとえ良い人であっても、悪い仲間と交わることから、汚れが付いてし
まふことがわかります。同様に、もし心の平安や平常心のような良い性質を持っ
ている善良な人が、悪い思いを持っている悪い人と触れ合うと、悪い人を変える
ことができないばかりか、自分も悪くなり、悪い性質に染まってしまうことがあ
ります。いったん、あなたの心があまり清らかでなくなれば、どれほど努力して
も、善良な道を歩むのはとても難しくなってしまうでしょう。本当に、もし人が
一瞬一瞬、絶えず自分の性質の中にある神聖さを実感し続けるなら、自分に内在
する神性を認識することができるでしょう。

過去世で行った良い行いの結果、そして、神の愛と恩寵を手に入れた結果、ゴーピカー〔牧女〕たちは、このような神聖な態度を育てることができました。彼女たちの生まれた場所はゴークラム〔牛の集まる場所〕と呼ばれる小さな村でした。その当時はどんな楽しみもありませんでした。当時の生活はとても厳しいものでした。大学どころか小学校もなく、牧女たちはまったくの無学文盲でした。読み書きはできませんでしたが、牧女たちはアートマの側面についてのとても優れた知識を持っていました。

今日の教育は、すべて外界に関連しているものです。それは生計を立てることを可能にしてくれますが、アートマの神聖な側面については教えてくれません。幸運なことに、当時は、今日私たちが学んでいるような知識や教育は存在しませんでした。現代の学習〔教育〕が、少なくとも私たちに善い行為をするのを可能にしているかどうか調べてみれば、答えが「ノー」であることは簡単にわかるでしょう。

牧女たちの人生は完全に真実の道に沿ったものでした。牧女たちは愛の道をたどって神性を追求しました。清らかさ〔純粹さ〕が彼女たちの人生の目的でした。アートマを理解することが彼女たちの目標でした。そのような性質をゴーピカーたちは備えていたのです。

今日の学生たちに、これらの神聖な性質のうち少なくとも一つでも身につける可能性はあるのでしょうか？今日の教育の主な特徴は、学位を取得することであり、それはただ頭上の重荷になっているだけのように見えます。このような学位を得たとしても、あなたはただ社会の重荷になるだけです。人はただ生計を立てるためにこうした教育を受けなければならないのでしょうか？鳥や獣たちでさえ、食べていく方法と手段を見つけてはいないのでしょうか？もし教育を受けるなら、それは私たちが生死の輪廻から脱け出し、自分たちの目的地を理解できるようにしてくれるものであるべきです。

あらゆる種類の教育を身につけたにもかかわらず、愚かな人は自分が誰であるかを知らず、自分の中の卑しい性質を手放すことができません。このような教育を身に付けても、ただ理屈っぽくなるだけで、賢くはなりません。私たちは、教育を身につけることによって、死と繰り返し生まれることから逃れる方法を学ぶべきなのです。ゴーピカーたちは、生死の輪廻から解放してくれる、この種の良い教育を身につけていました。

牧女たちの振る舞いを見ると、何か世俗的な願望があったかのように見えるかもしれませんが、それは真実ではありません。彼女たちは霊的な側面にしか関心

がなく、実際、彼女たちがどんな行為に夢中になっていたとしても、それらはリーラー〔神の遊戯〕であるのみでした。ゴーピカーたちとクリシュナの一体化はこの世の模範となりました。それはプラクリティとプルシャの一体化の象徴でした。ゴーピカーとクリシュナが語ったことや行ったことが低レベルなものに見えるのは、私たち自身の思考が低俗であるからです。実際、ゴーピカーとクリシュナが語ったことや行ったことはすべて、重要な意味を持っていました。

学生諸君、海のそばに立つと、海はとても広大で、果てしないように見え、境界線は見えません。もし高いところに上るか、しかるべき装置を使って海を眺めることができれば、海は一つの大きな湖のように見えるでしょう。同様に、もし私たちが自らを高め、適切な視点から物事を見ることができれば、ゴーピカーとクリシュナの出来事の真の意味を理解することができるでしょう。

しかし、私たちの人生はおかしな方向に向かっています。悪い思いや悪い行いでいっぱい的人生は、偽りのお芝居のように見えます。実際、私たちの人生はすべて、偽りの、仰々しい芝居のように見えます。ゴーピカーたちの人生は、本当に他の模範となるものでした。彼女たちの行いには、偽り〔不真実〕も不正も不公平もありませんでした。ゴーピカーたちは完璧な人生を送りました。現代において私たちが見ている映画やドラマのせいで、クリシュナとゴーピカーの一体化は肉体的な執着の一つと見なされています。ゴーピカーたちとクリシュナの合流〔一体化〕はとても神聖なものです。クリシュナのすべての行為は、真に理想的な模範として扱われるべきものです。クリシュナがしたことは何であれ、牧女たちが肉体や人生に対して持っていた小さな執着を破壊し、取り除くためのものだったのです。クリシュナの中の愛の側面は、牧女たちの心に刻み込まれ、牧女たちはその忘我の恍惚に浸っていました。

このことを示す小さな例があります。それはクリシュナがあるゴーピカーを訪ねた時のことです。その牧女は家にいないとわかっていたので、クリシュナは天井から吊り下げられていた牛乳の壺を壊して、あたり一面に牛乳をこぼしました。そして、その牛乳に自分の足を漬けて、地面に自分の足跡を残しながらその家を出て行きました。家に戻って来たゴーピカーは、クリシュナの足跡を見つけ、それをたどってクリシュナの居場所を見つけました。すると、クリシュナは言いました。「もし君が僕に到達したいのなら、君は僕の足跡をたどらなくてはならないんだよ。それが僕に到達できる唯一の方法なんだ」。このようにして、クリシュナは帰依者が自分に到達する方法、つまり道を示していたのです。クリシュナは真実〔真理〕の道を示す者でした。

また別の時、ゴーピカーたちはクリシュナに近づこうとし、その口実を見つけようしました。彼女たちはたくさんの不平不満を持って、連れ立って母ヤショーダーのところへ行きました。ヤショーダーが訪問のわけを尋ねると、牧女たち全員が言いました。「クリシュナは真夜中にテラスへやって来て、あるゴーピカーの髪ともう一人のゴーピカーの髪を結んで縛り上げたのです」。この出来事の内なる意味は注意深く理解しなければなりません。ゴーピカーたちはクリシュナが真夜中にやって来たと言いました。真夜中というのは日中でも夜間でもありません。ゴーピカーたちの知識は中途半端なものでした。つまり、牧女たちは神でも人間でもないということです。そのようなゴーピカーたちのために、クリシュナはやって来て、彼女たちの無知を縛り上げたのでした。

別の時、ゴーピカーたちはクリシュナに嘘〔非真実〕を話させようしました。そして、牛飼いの女たちが牛乳やカード〔凝乳〕の壺を運んでいたら、クリシュナがやって来て壺に穴をあけた、と苦情を言いました。彼女たちは母ヤショーダーに近づいてこう言いました。「あなたの息子にやったかどうか聞いてみてください」。ここでもまた、クリシュナが説明して述べた言葉の意味を理解しなければなりません。「たぶん、神がやって来て壺に穴をあけたんだろうね。僕は知らない」とクリシュナは言いました。クリシュナは遠回しに、実際に壺に穴をあけたのは自分自身だと言っていたのです。

牧女たちのもう一つの苦情は、次のようなものでした。「私たちが皆、川で水浴びをしていると、クリシュナは私たちのサリーを全部集めて木の天辺にのぼって座り、私たちが呼んでも下りてきてくれませんでした」。これに対して、クリシュナは言いました。「彼女たちが水浴びをしていた時、大きなつむじ風が吹いて、サリーを全部さらって木の上に運んでしまったんだ」。ここでの「つむじ風」とは神の一つの姿であると思わなくてはなりません。創造の基本元素〔五大元素〕は、地・火・水・風・空であり、風は神の一つの姿なのです。実際には、ゴーピカーたちはとても神聖なハートを持っていて、常にクリシュナへの思いにどっぷりと浸っていました。カードや牛乳やバターの壺を運んでいる時でさえ、牧女たちは恍惚の中で完全に我を忘れて、「ゴーヴィンダ、マーダヴァ、ダモダーラ」と唱えていたのです。

ある時、クリシュナがバターを盗んだことがありました。その日クリシュナは母親の前に姿を見せませんでした。母ヤショーダーは、もしクリシュナが大きな棒を見たらそばには来ないことをよく知っていたので、片手で棒を背中に隠し、もう一方の手でバターを持って、バターを見せてクリシュナを引き付けようしました。ここで私たちは、バターに例えられる純粋なチッタ、つまり清らかな心を見た時に初めてクリシュナはやって来る、ということをヤショーダーが理解し

ていたことに気づかなくてはなりません。神は清らかな心にのみ引き付けられるのです。

クリシュナがすべての衣服〔サリー〕を持ち去ったと言われている意味は、クリシュナは肉体への執着をすべて持ち去ったということです。衣服は肉体を覆うものですが、実際には、その肉体こそがアートマを覆う衣、あるいは付属物であり、アートマは肉体の中に宿っているのです。それゆえ、肉体はこの人生のための衣服にすぎません。ある人が死んだと言う時、それはその肉体が死んで、脱ぎ捨てられた、という意味です。ですから、このクリシュナの行為は、肉体に執着しているかぎり、真のアートマの相を見いだすことはできない、という意味に解釈することができます。私たちは、肉体の重要性について錯覚してはなりません。

プルシャ〔至高者〕の側面には、二つの種類——個人のプルシャと集団のプルシャ——があります。もし一個人であれば、その人はプルシャと呼ばれるでしょうが、個人の集団がいれば、それはプラグニャナム・ブラフマーと表現すべきです。これを説明する例として、もし一本の木があれば、私たちはそれを「木」と呼びます。しかしたくさんの木があれば、それを「森」と呼びます。木が一本しかなければ、それを「森」とは呼びませんね。同様に、一人の人間の姿の中にいる神は、「神なるもの」、または「アヴァター」〔神の化身〕と呼ばれます。しかし、全体の中に存在している神は、万物〔森羅万象〕と呼ばれます。

個人は、神がそう生まれることを望んだから生まれるのです。一方、名と姿のない神の相は、プルショータマ〔至高の存在〕と呼ばれています。プルショータマという無形の相が姿形をとったとき、私たちはそれをプルシャ〔至高者〕と呼んでいることも知っておくべきです。人間の姿をまとったとき、プルショータマは他の生き物たちに模範を示し、あらゆる創造物の一体性を明らかにします。また、アートマの側面は、清らかな心を持っている時に初めて悟ることができる、という真実も理解しておかねばなりません。

さらに別の時、ゴーピカーたちはヤショーダーのところへ行って、クリシュナがやっている悪戯は言語に絶するものだから、ここへクリシュナを呼んできて、二度とクリシュナが彼女たちの家に入って来ないことを確実にする措置を取ってほしい、と頼みました。牧女たちは不平をこぼして言いました。「クリシュナは夫婦の間に問題を引き起こします。クリシュナは夜にやって来て、扉をドンドンと叩くのです。もし私たちが扉を開けたら夫は怒ります。もし扉を開けなかったらクリシュナが怒ります。そんな状況に私たちは絶えず悩まされているのです。私たちの悩みをすべてあなたに説明することは不可能です。状況は、私たちがク

リシュナを忘れるか、夫たちを捨てるかしなければならないところまで来ているのです」。これらの申し立てに直面して、クリシュナは答えました。「お母さん、お母さんはとても純真な女性だから、この話をすべて信じているんだね。僕が簡単な答えをあげるから、自分でこの話が真実かどうか判断すればいいよ。僕はお母さんのベッドでずっと静かに眠っていたのに、どうやってお母さんを起さずに僕が夜に出かけられるの？ さあ、お母さんは自分で真実がわかるでしょう」。ヤショーダーは、苦情はすべて偽りであると思い込み、ゴーピカーたちを追い返しました。

この出来事は、ゴーピカーの夫たちを正すために、クリシュナがこの全ドラマを演じたということを意味しています。ここで、私たちが気づかねばならない小さな事実があります。その当時、クリシュナは実に7歳の少年で、ゴーピカーたちは皆ずっと年上でした。そんな状況で、夫たちが誤解する余地など本来ありません。そのような誤解が起こるのは、ただ単に、男性が持っている悪い性質や悪い考えのせいです。利己的な夫は、妻が自分の幼い息子と遊んだり長時間過ごしたりすることでさえ好まず、やめさせようとします。これは男性の神聖でない〔邪悪な〕振る舞いと見なすことができます。母親が自分の子供と遊んでいるときでさえ身勝手な考えや疑いを抱く夫であれば、よその子供たちと遊んでいるときに疑いを抱かないことがあるでしょうか？ 自分の利己的な思惑を邪魔するものを何でも疑うのは、男性の悪い性質です。

自分は夫たちを清めて純粋な心を作り出すために、この役割の一切を引き受けたのだと、クリシュナは言いました。ゴーピカーたちはとても神聖な心を持っていました。ですから、彼女たちを疑うことは大きな罪です。そして、クリシュナは7歳だったのですから、ゴーピカーたちに関連するクリシュナの行為について誤解を抱くことは、さらに大きな罪です。

ここには、悪い解釈の余地はまったくありません。夫たちは、神性の側面を十分に理解していなかったせいで、あらゆる類いの疑いを抱いていたのです。クリシュナは、この種の不必要な非難や汚点にさらされていたゴーピカーたちを守ったのです。こうして、クリシュナはアヴァターの側面〔観点〕を人々に伝え広めたのです。私たちは、人間のレベルで神のあらゆる行為を理解したり、解釈したりしようとすべきではありません。

神の恩寵を受けることができるような行いをするのが、私たちの第一の義務です。もし神の恩寵を手に入れることができれば、人生の一切が甘くなるでしょう。主なる神は甘さでいっぱいです。主の見る目は甘く、主の話す言葉は甘く、主の行為は甘く、主自身がまさに甘さの具現なのです。甘いサトウキビの汁がい

っぱい入った器にたくさんの穴をあけると、どの穴からも、流れ出てくるのは甘い汁だけで、酸っぱい汁や苦い汁が流れ出てくることはありません。それに鑑みれば、パラマートマ〔至高のアートマ／神〕は神聖な至福に満ちていて、神の創造においてそれとは異なるものを得ることはありえません。この後の日々も、ゴーピカーたちの信愛とクリシュナの神聖な側面について、より多くのことを学んでいくよう努めましょう。

サティヤ サイババ述

Summer Showers in Brindavan 1978 Ch17